

中国訪日スキー観光客増加に関する考察

富山県大連事務所 副所長 板谷 克行

1. はじめに

2019年明け、「平成最後」という言葉をよく耳にする一方で、「東京五輪まであと1年」ということも話題になるようになった。ご存知のように、2020年の夏季五輪は東京での開催が予定されているが、2022年に行われる次の冬季五輪については中国・北京での開催が予定されている。2018年に行われた前回冬季五輪は韓国・平昌で行われたため、夏季・冬季あわせた五輪については3回連続で東アジアでの開催となっており、東アジアのスポーツ界は大きな賑わいを見せている、と言える。

中国の旧正月（＝春節）における所謂「民族大移動」については、2015年に「爆買い」が流行語となったこともあり、日本でもよく知られているが、今年の春節中もご多聞に漏れず日本へは多くの中国人観光客が押し寄せた。現在中国の訪日観光客の目的は「モノ消費」から「コト消費」へとシフトしていると言われており、日本全国のスキー場に中国人スキー観光客が大量に押し寄せたニュースも話題となった。日本のスキー・スノーボード人口はバブル崩壊後、少子高齢化や、人口減少を背景として1993年をピークに1,860万人から、2017年には620万人へ減少しており、（出典『レジャー白書2018』）、中国人観光客の急激な増加に多言語対応・人手不足等で現場には困惑と混乱が発生していた、との報道もあった。

2. 政府の動き

2015年中国習近平国家主席は、冬季五輪誘致にあたり、「北京で冬季五輪を開けば、中国で3

億人以上が氷と雪の上のスポーツに参加することとなる。」と述べた。その後、中国国家体育总局が各部と連携し発表した『大衆冬季スポーツ拡大普及計画（2016-2020）』によれば2020年までに「冰雪スポーツ（スキーやスケート等）に3億人が参加する」ことが、目標に掲げられ、施設の充足、大会の増加、組織組成、産業発展、国民への普及などが盛り込まれており、政府主導でも積極的なスキー・スノーボード人口の拡大が図られている。

3. 訪日スキー観光客増加現象の背景

中国国内のネット上では、一度経験すれば毎シーズン行わずにはいられないその中毒性から、スキー・スノーボードを「白色的鴉片（＝白いアヘン）」と呼び、ブームは年を追うごとに加熱している。

これまで、スキーを始めとする冬季スポーツは、1年を通じて温暖な南部では普及しにくい上、スキー場の多くが北方に集まっており、装備・移動のコストから、富裕層や海外留学先での経験者、競技者といった一部の人間にとっての娯楽だった。現在SNSの流行や、所得向上、国内インフラの急速な発展も相まって一般的な娯楽へと変革を遂げつつある。

それに伴いスキー場も凄まじい速度で増加してはいるものの、その増加率はスキー・スノーボード人口のそれには及ばない（図1参照）。その上、スキー場の規模の大小にはかなり差があり、リフトを持つある程度の規模を持ったスキー場となると、2018年現在で149箇所程度しか無いとの統計もある（出典『2018年中国スキー産業白書』）。

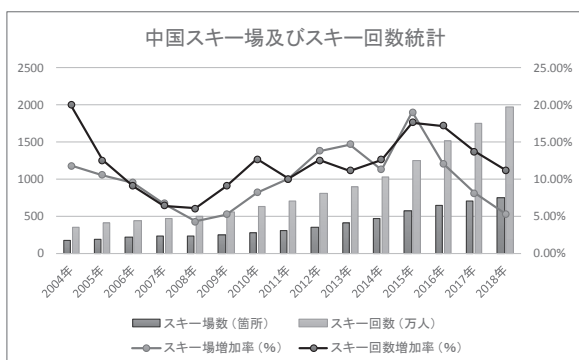


図1 中国スキー場及びスキー回数統計
出典：2018年中国スキー産業白書

さらに、中国国内は日本の25倍以上という広大な国土に比べ、過去50cm以上の積雪を記録した地域が非常に少なく、新疆ウイグル自治区とチベット自治区を除けば、黒龍江省と吉林省の一部のみである。(図2参照)したがって、それ以外の場所で新設されたスキー場は、積雪の不足分を人口降雪で賄うこととなる。積雪が少ないにもかかわらず、自然積雪が望める地域の冬季の“平均気温”はマイナス20℃前後とかなり低温であり(図3参照)、その人口の多くを初心者が占める中国のスキーヤー・ボーダーにとっては過酷な環境での経験を強いられることとなる。スキー指導員の圧倒的な不足により大量の初心者が発生しており、その初心者との接触トラブルや事故を嫌い、かつてのスキー愛好者が日本でのスキーを好んで行うようになったということも一側面にはある。

つまり、中国は抱えるスキー人口とは裏腹に、雪上スポーツを行うには決して恵まれた環境には無い、と言える。言い換えれば、冬季の平均気温がマイナス10℃にも届かず、豊富な積雪量が確保できる日本は、初心者に限らず中国のスキーヤー・ボーダーにとってみれば正に天国であり、昨今の中国人訪日観光客が大量にスキー場に押しかけることは、ごく自然な現象であると言える。そしてその現象は一過性のものでは無いと推察できる。

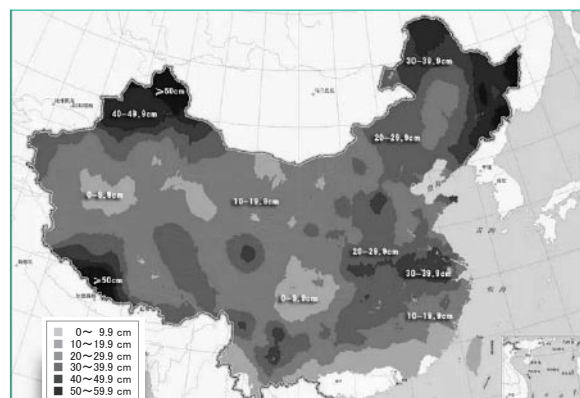


図2中国積雪分布図(1981年-2010年) 出典：中国気象报社

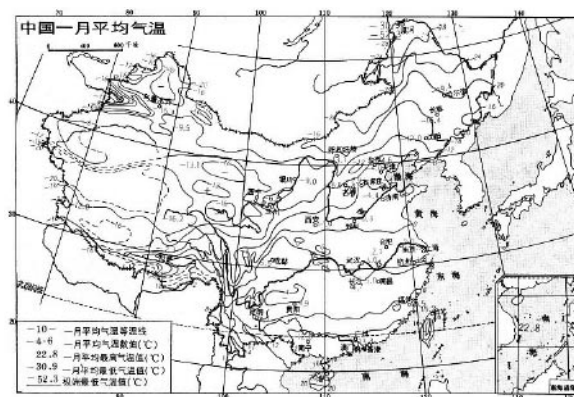


図3 中国1月平均気温

4. おわりに

日本政府観光庁がまとめた『海外スキー市場に関するデータ整理(平成30年6月1日)』によれば、「潜在的スキー人口が多い一方で、自国のスキーリゾート数(リフト5基以上)が少ないのは中国(1,210万人、84箇所)、ドイツ(1,461万人、80箇所)、英国(634万人、5箇所)であるので、スキーリゾートへのアウトバウンド国としては中国、ドイツ、イギリスが有望と考えられる。」と一文目に中国からの訪日観光客への注目度が非常に高いことが分かる。

中国国内の冬季スポーツ人口の増大と冬季スポーツ市場の爆発的な拡大は、冬季スポーツ産業分野で中国に優位性があり、距離の面では冬季スポーツ先進国の欧州に優位性がある日本にとって、注目に値する現象であり、当事務所も引き続き注視していきたい。